

日本橋の思い出

今日 あした

みずきの所属する部は、明日、この日本橋支店から渋谷支店に引越すことになっている。昼休みになり、その等中にふたを開けている段ボールや、立ち働く人々を掻き分け乍らみずきは社員食堂に向かった。この食堂も今日が最後だ。

真剣に何種類かある今日のお薦めメニューを見てから、トレーを持ち、蕪と魚介をホワイトソースでからめたスパゲッティと、シーザーサラダ、それにコーヒージェリーを選んだ。

すでに課長仲間が席を確保して待っている。

テーブルにつき、フウーつと一息ついて他の二人のトレーに目を遣ると、一人は中華で、酢豚と春雨のサラダ、もう一人はみずきと同じイタリアンだったがミートソースの上に半熟玉子のつたスパゲッティとアボカドサラダだった。気のせいかもしれないが、私と同じように最後の昼餐を意識して力を入れて選んだのだろうかと思って、

「日本橋はメニューの種類が多いし、味も結構いいけど、渋谷はどうかしら」と言うと、案に反して

「どこも大して変わらないのじゃないですか」

「新宿支店の社員食堂なんか最悪でしたよ」

「えーっ！」

みずきは、銀行に入社以来二十五年間、ずっとこの日本橋に通っている。最初はK銀日本橋支店だったが、何度か合併して銀行名が変わり、それでもビルの中だけで移動していた。

今度の合併で、今担当している金融債が整理されることになり、とうとう日本橋を離れて渋谷の事務センターで整理業務をすることになった。

課長三人のうち、みずきが一番年長で、日本橋を一度も動かないのもみずき一人だから、思い入れが強いのだろう。

「行きたくないなあ」もう何度も口癖のように言っている。

「日本橋が良いなんて、古いですね。これからは若者の街、渋谷ですよ」「みずきさんが入社した時の日本橋って、どんな感じだったのですか」

「何か、忘れられない思い出でもあるのですか」

「大恋愛をしたとか、ガハハッ！」

「人を年寄扱いして……」

食堂から喫茶室に移り、好き勝手なことを言いながら、昼休みはあつという間に終わった。

みずきは、あれは…これは…とシュミレーションをしながら、引つ越し先への段ボールの移動は頭の中ですでに終わっている。

後は今日の取引を処理するだけなのに、部屋中が殺伐として、声が飛び交い落ち着かない。人の出入りも多く、陣中見舞いに顔を見せる人もいて、おちおち席に座つてもいられなかったが、十四時を過ぎると来客も途絶え、やっと自分の椅子に腰を落ち着け、気を抜いた。

しばし、放心状態のまま、昼休みの会話を思い出して改めて思った。もう若くないし、渋谷の人混みを考えただけで疲れる。私ももう四十を過ぎてしまったのだもの。

日本橋には値段は高いが、落ち着いて食べられる美味しいお店が何軒もある。そうかあ、日本橋を離れたくないのは、食べるだけが楽しみなのわたしの人生の所為かあ。

K銀から内定の通知がきた時は嬉しかった。

お昼休みに独身貴族の二人に挑発されたせいか、みずきは唐突に入社当時のことを思い出した。

水色と白のストライプのブラウスに紺のチョッキとタイトスカート。襟元に淡い桃色のリボンをつんだ制服姿で入社式に出たときの晴れがましき。

最初に配属されたのが情報開発部で、その中で総務のような仕事をしていた。その一郭は女性ばかりで当時としてはめずらしく、四十歳くらいのオバサンが課長で、いつもまわりを睥睨してはにらみを利かせていた。月末ともなり、他行の端末との取引可能な三時二十分が近付くと部屋中が殺気立ってくる。みずきもパソコンと仕事を往復しながら慌ただしく仕事をしている時、課長にぶつかりそうになった。

「河合さん、大きな図体で…邪魔なのよ！」。にこりともしないで言った課長の顔を、自分が課長になった今でも覚えている。恐かったなあ。当時はパソコンの台数が少なく、共同で使っていたのだ。

仕事を教えてくれたのは三十歳くらいのミセス青木。最初の一ヶ月は面白くて優しかったが、少し慣れて小さなミスが目立つようになると鬼になった。

「私は言いましたよね、なんと教えられたか言ってごらんさい」

「……………」

「黙っていたら分らないでしょ、なにも教わらなかったのですか、私は教えませんでしたか」 声に強弱をつけ果てしなく続く。怒っている最中に、入社した時から同じ課に配属された、同期の緑川芽衣と目が合い、意味有り気に顔を見合わせたらミセス青木は完全に切れた。

「何を考えているのですか、習うのが嫌なら教えなくてもいいのですよ」

昼休みになると芽衣は、怒られた私を、度々慰めてくれたものだった。喫茶室の片隅でやおら真剣な表情をつくると身振り手振り、ミセス青木の真似をする。彼女は怒る前、背筋を伸ばし肩を持ち上げながら鼻をひくつとすする。すると目つきが沈み陰険になる。その、さあ怒るゾ！といった顔がそっくりなのだ。何度見ても吹いてしまう。

みずきは上司に注意をされるとすぐに顔に出るが、芽衣は違う。大きな声で怒鳴られても平然としている。その後の反省タイムで無視されている間も自分で書いた仕事のマニュアルノートを眺めながら、反抗的にも見える程大胆に足を組み、堂々としている。大物だなあ、と思うが、見ているだけでドキドキする。そんな正反対の二人だが、とても気が合っていた。

貫禄があって頼りになる芽衣は男性社員に結構人気があったらしい。忙しくて会社と家を往復しているだけだったはずなのに、彼女は三年もしないうちに情報開発部のエリート社員と結婚して寿退社をしてしまった。

あの頃は、置いてきぼりを食った私は、さぞや世の中の不公平さとか、ついていけない自分に対する不条理だとかを噛みしめていたのだろうか。

入社して五年目だった、班長になったのは。班といっても、机を向い合せて八個並べただけの人数で、入社して何年もたっていない子にお姉さんのように慕われていい気になっていた。そんな時、私の班の一人が課長に呼びつけられて怒られている。私に言えばいいのに……横目で見

ながらカツカしていると、私まで呼ばれた。

「河合さんちよっと。あなたが教えたのでしょ、あなたの精査印もあるわよ。すこしは落ち着きなさいよ！」 伝票の記載が間違っていたのだ。各課には、毎日支店から送られる未処理のものを入れる透明のボックスが置いてある。そこにあらかじめ種分けしたものを入れ、それぞれが仕事に応じて処理をしている。顧客から送られてくる書類は、印鑑が間違っていたり、名前が登録されているものと違う字体だったりするものもあるのです、何人もの目で矯めつ眇めつ確認し、事務処理をする。

書類には種分けした人、それを確認した人、事務処理をした人、精査をした人……と何人もの印鑑が押されていく。

ミスが見つかった時にはその印鑑をさかのぼっていく。こんなに厳重にしても人間は間違いをするものなのだ。

「えっ、私の精査ですか……ごめんなさい！」 思わず勢いよく言ってしまった。

そこに同じフロアーの情報開発部の山口さんが通りかかった。

私は横目に見て一瞬のうちに彼情報、東大卒、未婚、キツネ目が頭をかすめた。山口さんに見られている、いやだ！ 彼は私をチラッと見て皮肉に笑って通り過ぎていった。

私は何て馬鹿なのだろう。伝票を見たら間違っていると思え！ といつも言われているのにすっかり忘れて、周囲を楽しくすることばかり意識して自分がまだ精査ミスをしているなんて……恥ずかしい、消えてしまいたい。部屋を抜け出し洗面所に逃れた。

この銀行も合併を繰り返しているうちに名前が変わっただけでなく中の様子も随分違ってしまったが、当時、情報開発部のあったこの七階には役員室もあり、中央の階段は大理石で出来ていた。トイレもそれなりにいかめしく、今でも大理石で彫刻されたトイレ入口の枠だけが昔の名残をとどめている。

重い足で部屋に帰ろうとしたら山口さんが目の前に現れた。

とっさに下を向いて行き過ぎようとする

「君、お辞儀をするときははいぶん深々とするんだね、ほとんど二つ折りだったよ」

私は顔があげられなかった。

「僕がお疲れ様会をしてあげるよ」。そんな風に、山口さんのお付き

合いが始まった。

初めのころ、私たちは鎌倉に行った。

江ノ電に並んで座ると、目の前に海が開けて、光をはねつ返したさざ波がきらきら光っていた。光線も電車の揺れも、線路際の家々も、目に映る何もかもを私たちは言葉で言い合った。

鎌倉に着くと賑やかな小町通りに入ってしまった。狭い通りに人があふれ、小さな店が軒を並べ、呼び込みの声、甘辛い匂い、に私たちはすっかり浮かれて

「小野小町もびっくりね」

「あれ、君は秋田こまちの方がいいのじゃないの」

「そんなあ！」と戯れながら道をそれて若宮大路を横断して鎌倉彫会館の横から雪の下の住宅街に入った。

いつもの背広姿の隙のない、ちよつと暗い感じの山口さんとは違う人みたい。住宅街の細い道は切れてしまいそうでまた細々と続いている。

「鎌倉には文士がたくさん住んでいるのだよ」

そう言つて更に細い路地に入った。作家の邸は庭の植え込みが垣間見えるような板塀で、風通しに気を使った庭では、数羽の小鳥が遊んでいた。

山口さんはざっくり編んだ厚手のセーターの上にフードの付いたダッフルコートを着ている。会社で見るよりもずっと垢ぬけて都会的に見えた。

誘われて彼の家に遊びに行ったことがある。お袋はいないが、おやじがいると言うことだった。行くまでの一週間、部屋中に裁縫道具をちらかしながらミシンを踏んで、ワンピースを作った。大柄の私には可愛いデザインは似合わない、かといって凝ったデザインは無理だ。淡いピンクのウール地で、すんとしたポートネックのミニにした。太めのリカちゃん人形のようなだが、まあまあ上出来！これにペンダントをつけて、靴は、バックは、と、鏡の前で身をくねらせた。

駅前まで待ち合わせて細い道をくねくねと歩いた先に彼の家があった。腰の高さの檜の門と杉の生け垣は私の田舎にもありそうだ。玄関をはいると、ここが応接間だけ……と広い部屋のドアを開け、そこには入ら

ないで廊下を左に行った部屋に案内された。食堂のようで、大きなテーブルに赤と白のタータンチェックのテーブルクロスがかかっていた。そこにカメラをいじっている彼の父親がいて紹介された。

その家は外から見たよりずっと広く食堂の前にベランダがあり広い芝生の庭が広がっていた。すごい家！ 美容院で見た家庭画報のグラビヤみたい……と見とれていると、

「いらっしやい、河合みずきさんは、邦夫の会社の方ですって、どうぞお掛けなさい」

山口さんに年をとらせて上品にしたような彼の父親が静かな声で言った。

「はい……」

「河合さんはどちらの学校を出られたのですか」

「県立宮崎商業高等学校です」

私は学校名を言うとき、誇らしい気持ちになる。宮崎の人ならだれでも知っている。学校は市内にあるが、生徒の半数は下宿をしながら通っている。他県からも受験するほど優秀な高校なのだ。

「それから大学に進学されたのですか」

「いいえ、卒業してすぐに銀行に入りました。いところが東京の大学に通っていたので一緒に下宿をさせてもらうことにして、学校の推薦をもらって東京の銀行を受けたのです」

「そうですか」

そこに、通いのお手伝いさんだと紹介された人が入って来て、紅茶を置いて出て行った。出ていくのを何気なく見送って彼の父親は

「河合さんのお父さんは宮崎で何をなさっているのですか」、と静かに聞いた。

「自営業です。魚屋をしています」

「ああ、では、ご両親で？」

「はい。祖父母も一緒に住んでいるので、忙しい時には手伝ってくれます」

「そうですか」、と言ったきり、彼の父親は傍らに置いてあったカメラを手に取ると「では」と言って、さっと部屋を出てしまった。不自然に唐突だったので、私は思わず山口さんの顔を見てしまった。

彼の父親をポカンと見送った私は「先週の奈美さんみたいね」と言った。彼も食堂にいるのが気づまりだったのか、二階にある彼の部屋に行こうと、さつさと歩きだした。そこは四畳半ぐらいの狭い洋室で木の勉強机が目に入った。その横に本棚があり、全部が焦げ茶色で、きちんと整理された部屋全体が、暗く見えた。入口の横には木のベッドがあつて布団はきちんと畳んで端に重ねられている。高校生の部屋の方だった。私たちは窓に向つて硬いベッドに並んで腰をおろした。彼は私の方を向くと強い力で抱きしめ、下を向きながら顔を押し付けると、絞り出すように「君のことを僕は何も知らなかった」。

「君の従妹は薬科大学を出て薬剤師をしているじゃないか」と言った。その行動と言葉に私は当惑した。

前の週の日曜日には山口さんが私の家に来たのだった。いとこの奈美と住んでいる2LDKのマンションは、彼女が薬科大学を卒業後、薬剤師として大病院に勤務するようになってから引越してきた。

奈美には山口さんのことは話してあつたが、改めて同じ会社の情報開発部の人だと紹介した。奈美は「そうですか」と浮かない顔で相槌をうち、そそくさと外出支度を始めた。

年上の彼女は私にとっては姉のような、お目付け役のような、少し煙たい存在なのだ。彼女は出がけに山口さんに会釈してから私を呼ぶと、「男人人を家に連れてきたっちゃから、きちんと気を引き締めんといかんよ」と言い残して出かけて行った。奈美には山口さんが来ることを話してあつたのに……。

私は急に気づまりになり、何を言つても何をしてもぎこちなくなつてしまった。

気を取り直して、本を見ながら作ったラザニアとサラダを並べ、紅茶を淹れて、ダイニングキッチンに向い合せて坐つたが落ち着かない。

「本を見て作ったのよ。……」言葉が続かない。山口さんが話している言葉も、頭の上を通過していく。ラザニアもサラダも作った時には上手く出来た思つたのに、もう味もわからなかった。彼はしきりに美味しい、美味しいと言っているのに、そんな訳はない、とどんどん暗くなつてしまふ私に向かつて、彼は帰り際に慰めるように、次の土曜日に家に遊びに来ないか、と言つたのだった。

引越しを控えた退社時間間の事務室は大変な騒ぎだ

すでに梱包済みのものはA1・B3と、新しい事務所のどこに置くか分かるように記号を付けて廊下に山積みされている。数少なくなった未処理のものを入れる段ボールがふたを開けて控えている。

午後7時、アー終わった。机の上に残っているものを最後の段ボールに入れてガムテープで止めた。「D-4・財形課・山口みずき」と黒のマジックで書いた。

山口みずき……思えば河合から山口に変わるまでの時期は、怒りと情熱が渦巻いていた。

「育った環境が余りに違い過ぎると、珍しいうちは面白いけど、その内について行けなくなるのではないだろうか」

「じゃあ、今は珍しいのや面白いのが好き？嫌い？」

「嫌いではないけど、みずきはどうか」

「先入観ばかり気にする邦夫さんは嫌い。物知りの所、好奇心があるところは好き。性格が悪いところも好きかも……」

又、何日か経つと

「結婚して良い子孫を残すのが人間の務めだから、自分より少しすぐれた家系の人と結婚をすべきだっておふくろが言うのだ」と彼。

「じゃあ、家系と結婚すればいいじゃない」

「好き」

「嫌い」

「もう会わない」

「愛してる」

何回繰り返しただろう

「人は病気をするかもしれないし、気持ちが変わるかもしれないじゃない、今は、愛していて一緒に居たいのだから……」

「障害が多すぎないか」

「結婚するのは誰なの」

あの情熱がなつかしい。

終了。

運送会社の人が明日から勤務する渋谷の事務所に荷物を運び、今日の

うちにセットしてくれることになっている。

この界限をこんな時間に行くことはもうないだろうな。老舗の菓子屋のビルの裏玄関には黒塗りの車が止まり、白い手袋をした運転手が主を待っている。そんな光景があらゆるでも、こちらでも。こんな日本橋らしい風景を見ることもそうないだろうな。

私は遠回りをして高島屋の方に向かった。まだ暮れきらないビルの角を曲がると遠くに明かりのともった高島屋が見える。

未来を決めかねていた時期、胸の中の泡立ちが表面に出してもどうにもならない。会いたい、会いたくない、でも邦夫のことしか考えられない。しばらく連絡を取り合っていなかった、そんな時、偶然に会社帰りにはばったり会った。一緒に食事をしたのだが、お互いに、耳障りな言葉を避けて黙りがちだった。レストランを出ても別れがたく、日本橋界限をぶらぶら歩いて、ビルの一角にある、入り口にアーチの張り出したおしゃれな喫茶店に入った。

お腹がいっぱい、しばらく歩いたので、喫茶店のふかふかした椅子は心地よく、二人で顔を見合わせて思わず顔がほころんだ。邦夫は機嫌のよい時によく言うように、「高島屋の前身は、デパートではなくて大きな呉服店だったのだよ」、と言いながら、長谷川時雨さんの本をカバンから出して抜粋しながら声を出して読んだ。

「着物姿の町人が大勢歩いている。俵が行く、車夫が走る。道端ではせんべい屋がいいにおいを振りまき、のぞいている人、買って行く人、糸問屋、金物問屋、足袋問屋に交じって蕎麦屋、べつ甲屋も見える。荒物屋の小さな店先には品物があふれるように積んであり、急な買い物でもするのか小走りですり込んでいく女中さんが見える。その向こうつ角には運送屋の店蔵、立派な土蔵づくりの八百屋もある。土一升、金一升の日本橋のにぎわい」長谷川時雨さんの生まれ育った日本橋の情景。邦夫がプロポーズをしてくれた思い出の日本橋。

向こうから邦夫が歩いてくる。今は上野支店に勤務している私の夫は、開始時間の二時間も前に家を出ていく。私はあわてて、「日本橋支店に行くのも今日までだから、仕事の都合がつかいたら、どこか、美味しいお店に行かない」と言って彼を送り出したのだった。

了